

受領者投稿

未来に期待してくれた、あしながおじさん

金沢大学 医薬保健研究域 保健学系 助教 田中 利 恵
(第14回受領者)

立石科学技術振興財団の研究助成に申請したのは、極貧生活真っ只中の大学院修士課程2年のときでした。「研究を仕事にしたい」という夢を実現するために、博士課程への進学、すなわち極貧生活続行も決まっていた。このときの私は、業績も実績ありませんでしたが、「実現したいアイデア」だけがありました。そして、「過去の業績をたたえる」一般的な賞や助成金と違う、立石科学技術振興財団の「未来に期待」する助成金の支援を受けることができました。そのときのアイデアは少しずつ、しかし着実に形になりつつあります。その業績が認められ、今は母校の教員として研究や教育に勤しむ毎日です。私にとって、立石科学技術振興財団はまさに「あしながおじさん」です。

その「あしながおじさん」の正体が気になって、調べたことがあります。そして、「ものづくり」なら一度はあこがれる「プロジェクト〇」に取り上げられていたことを知りました。番組タイトル「通勤ラッシュを退治せよ、世界初自動改札機誕生」。「高度経済成長下の昭和30年代、人口集中に伴い、鉄道の混雑が大きな社会問題になっていた。ダイヤの乱れ、ホームからの転落事故などが多発。鉄道会社は、各メーカーに自動改札機の開発を打診した。「不可能だ」と各社が後込みする中、手を挙げたのが立石電機（現オムロン）だった。社長の立石一真（67）は、極貧の中で妻を亡くし、7人の子供を育て上げた苦労人。以来「人の役に立つ機械の開発」をモットーにしてきた立石は、採算度外視の開発を決意。若手技術者を集め、開発に当たさせた。…完成までに6年を費やし、磁気の技術に革命を起こした。（番組HPより引用）。私はこの「ものづ

くり魂」に強く共鳴しました。常に結果を出し続けられないのが、研究開発です。研究に行き詰まったときや迷いが生じたときには、この記事を読み返しています。



そして、自分の研究生生活の原点に立ち戻り、「実現したいアイデア」を再確認しています。

助成いただいた研究課題「胸部X線動画像を対象としたコンピュータ支援診断システムの開発」は臨床評価の段階に入り、データ収集とフィードバックを地道に行っています。実用化にはもう少し時間がかかりそうですが、「人の役に立つ医療機器の開発」が「あしながおじさん」への恩返しと考え、これからも研究開発に全力を投入したいと思っています。

さいごに、未来に期待してくれた「あしながおじさん」と財団関係者の皆様へ一言。いただいたチャンスを無駄にはしません、本当にありがとうございました。これからも、若手研究者の小さなアイデアに門戸を開き続けてください。

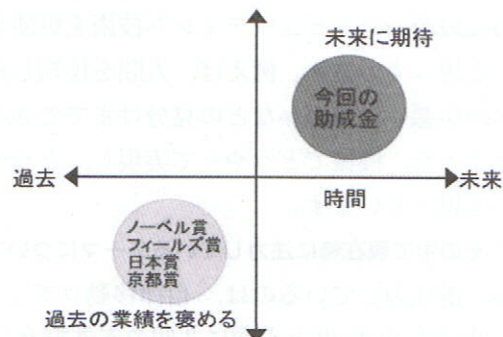


図1 立石科学技術振興財団研究助成の思想